



JAPANESE A1 – HIGHER LEVEL – PAPER 1
JAPONAIS A1 – NIVEAU SUPÉRIEUR – ÉPREUVE 1
JAPONÉS A1 – NIVEL SUPERIOR – PRUEBA 1

Tuesday 17 November 2009 (afternoon)
Mardi 17 novembre 2009 (après-midi)
Martes 17 de noviembre de 2009 (tarde)

2 hours / 2 heures / 2 horas

INSTRUCTIONS TO CANDIDATES

- Do not open this examination paper until instructed to do so.
- Write a commentary on one passage only.

INSTRUCTIONS DESTINÉES AUX CANDIDATS

- N'ouvrez pas cette épreuve avant d'y être autorisé(e).
- Rédigez un commentaire sur un seul des passages.

INSTRUCCIONES PARA LOS ALUMNOS

- No abra esta prueba hasta que se lo autoricen.
- Escriba un comentario sobre un solo fragmento.

次の1の文章と2の詩のうち、どちらか一つを選んでコメンタリー（解説文）を書きなさい。

1.

海は乳色の霧の中でまだ静かな安息を立てていた。蘭草のような丈の高い水草の間では、それでももう水鳥が目を醒ましていて、羽ばたいたり、きいきいとガラスをこするような啼声を立てていた。灰色の汚れた雪のような鷗はオレンジ色のビイ玉のような眼をしつとこちらに向けて横柄に脚で砂を掻いてはふい、と横を向いた。

5 歩いていると、霧が流れてくるようであった。由梨は破れたストッキングの間でざらざらする砂をたわめた足の裏で脇に寄せるようにしながら歩いた。海は黒味を帯びた藤色であった。バスの停留所の黄色い標識のところには鳥打帽を被ったズツクのボストン・バッグを持った若い男が一人待っていた。

「霧があがれば、いい天気になりそうだなあ」

10 男は由梨に言うとも、独り言ともとれるような領き方で言った。

由梨は霧の流れていく、濃い乳色の壺の奥でかすかに光っている海に目をとめたままの姿勢で、眺の砂をたわめた小指の先でしきりに脇に寄せた。暫くして、目を落すと、蟹が二匹連れ立って由梨の爪先からほんの二三十厘のところを這っていた。蟹の甲羅は甲羅であつて、顔ではないのだが、どういうわけだか、由梨は何時でもそのいびつな蟹の甲羅が顔に思えて仕方がないのである。蟹は潤んだ二つの長い眼を突き出して、二匹の蟹は脚をもつれさせるようにして這っていた。甲羅の両端は尖っていて、海の色とそっくりの暗い藤色の殻であった。

「バスが来たよ」

鳥打帽の男は行った。

一番の郊外バスには五六人の客しか乗っていないかった。

20 「どうしてこんなに霧が濃いんだろう」

霧は首筋にも肩にも吹きつけるように流れてきた。

「し市まで」

由梨は手提のジッパーをはずしながら言った。

「八十五セント」運転手兼車掌は言った。

25 そんなに遠くまで来たのかと思いながら金を探したが細いのが足りなかった。二十弗札があつた筈だと札入れの方をあけて見たが、無かった。後で鳥打帽の男が待っていた。

「ちよつと待つて、席に坐つて探しますから」

由梨は一番前のあいている席に腰かけて、財布を調べ始めた。無かった。昨夜出がけに確かに

30 入れた二十弗札が無かった。何時も大きい紙幣は札入れの方に入れて、小銭はべちんと口のしま
る^{かまぐち}蝦蟇口の方に入れておく。蝦蟇口には六十五セントしか無かった。
鳥打帽の男が隣にどすんと坐った。
「どうしたんだい。金を落したのかね」
「そうらしいの」
由梨は^{なお}猶も^て手提^ての底に落ちてはしまいかとまさぐった。小銭が一二三指先にさわった。それ
35 をあつめて由梨は運転手に払った。
「遊園地のところに止まるでしょうか」
由梨は訊いた。
「どの入口？」
「オペラ・ハウスの方」
40 「北口かね」
「だと思っけれど」
由梨は車の鍵はある、と^て手提^ての中でまさぐりながら言った。
「すぐ近くに止りますよ」
運転手と鳥打帽が同時に言った。
45 彼女はもう一度財布を調べた。札入れの二十弗紙幣は見つからなかったが、小物を入れるボケ
ットの中からくしゃくしゃになった一弗紙幣が出て来た。口紅のついている^な萎えた紙幣であった。
「霧が深いなあ――」
鳥打帽の男は再び独り言というでもなく、由梨に話しかけるでもなく、言った。
由梨は霧の中に沈んでいく濃い藤色の海と、陽の光の増し始めた中で妙にうら哀しくまたたい
50 ている「三匹の蟹」というネオンを代る代るに眺めていた。

(大庭みな子、『三匹の蟹』一九六八年)

(注) 鳥打帽 前びさしのついた帽子。ヘンチングキャップ。

2.

歲月

ぼくはまた帰っていくだろう

みそぎざい^いどもが
うるさくとびまわっている
あの浅い溪流をこともなげに渡って

5 昔のままの藤づるが
ぼくの小さな窓にからみ
のびでている名も知らぬ花と
花がいつしか実になり 散っていった
乾いた殻^{かわ}とがそこにある

10 ここでは失われた時間^あもまた
在るがままの地^ちに時^{とき}かれて
ありふれた草や木の芽といつしよに育つていつたらしい

15 だから潤沢な風の香気が
瀬を渡るぼくのぐるりに戯^{たわむ}れてくる
ちゃんと見覚えてくれていたもののよう

わずかばかり
僕は笑うだろう
初めて自分にめぐりあえたような
どちらかといえば悲しいためらいの中で

20 僕がこの山奥の孤独な棲家^{すみか}をすてたのは
あまりにもここが住みよくて
まるで墓場のように懐かしすぎたからだつた――

(伊藤桂一、詩集『竹の思想』一九六一年)

(注) みそぎざい いげ茶色の小さな鳥で、水辺に多く見られる。鳴き声が美しい。